

5 阿蘇千年の草原を後世へ



桐原 章
KIRIHARA Akira

公益財団法人阿蘇グリーンストック
専務理事

人々の取り組みによって維持されてきた、阿蘇に広がる草原。この地を訪れた多くの人を魅了する風景であるばかりか、生物多様性を守り、熊本の地下水源を維持するなど多くの役割を担っている。阿蘇の草原を守る取り組みを紹介する。

広大な阿蘇の草原

火山で有名な阿蘇ですが、東西18km、南北25km、周囲128kmに及ぶ世界最大級のカルデラ地形の上には、日本一を誇る広大な草原が広がります。

この草原は自然にできたものではなく、千年におよぶ古代から人々の手によって維持されてきました。昔の人々は稲作に代表される農業を営み、それと密接に関わる役牛などの飼育のため、また農業に欠かせない肥料を生産するために、草原を活用し維持してきたと考えられています。阿蘇の草原が今あるのは、地域の人々がなりわいとして、放牧、採草、野焼きといった営みを続けてきたことによるものです。

現在、約23,000haと言われる阿蘇の草原面積の約70%にあたる16,000haで毎年野焼きが行われています。野焼きは草原の森林化を防ぎ、草の目立ちを促す管理作業です。草原性の生き物は早春の火入れでは大きなダメージを受けることはなく、広々とした草原で世代を繋ぐことができます。

入会地

阿蘇の草原の多くは、集落ごとに定められた入会地となっています。入会地とは、阿蘇の場合では、入会権という権利を持つ人が、牛馬の放牧・採草を行う草原や



写真1 23,000haにも及ぶ雄大な阿蘇の草原

薪を得るための森林を共同で利用する共有地のようなものです。入会地の多くは市町村が土地所有者となっていて、古くからの利用形態である入会権を慣習的に認めているという状態です。

草原の維持管理は、入会地を利用しておもに畜産業を営んでいる農家で組織された牧野組合ほくやくみあいが行っており、野焼きや輪地切り（防火帯づくり）、牧柵・牧道の修理・修繕などがあります。

トラクターなどが普及する前は、各家で役牛や馬を数頭飼っていたので、集落の誰もが入会権を持ち、牧野組合にも所属していました。しかし、機械化や化学肥料の

普及、農業以外の職につく人の増加などの様々な理由から、無畜農家が入会権を持つケースや、入会権を放棄する人が多くなっています。それに伴って、多くの人手が必要となる草原の維持管理が困難になってきています。



写真2、3 阿蘇の草原にはサクラソウ（左）やツクシマツモト（右）など、希少な美しい野の花が咲きます

阿蘇草原の多面的価値

阿蘇には年間1,600万人（2015年資料）を超える観光客が、広大な草原や牛馬が放牧されたのどかな風景を楽しみに訪れています。多くの人たちに愛される草原の風景は阿蘇の大きな財産といえます。しかし、草原の価値はそれだけではありません。

阿蘇の草原は全国の草地構成と比較しても、二次草原といわれるススキ草原とシバ草原の面積割合が圧倒的に高く、この二次草原は、氷河期からの生き残りである大陸系遺存種の生育環境として重要なことも明らかになっており、草原生態系保全上も重要な地域といえます。

日本一の規模を誇るサクラソウの群生、阿蘇地域とその周辺にしか生育しないハナシノ

ブ、絶滅危惧種であるヒゴタイやツクシマツモトなど、四季折々に可憐な草花が咲き誇ります。また、阿蘇は森林と草原の両方の自然環境に恵まれていることから、豊富な種類の植物（1,600種）、鳥類（150種）やチョウ類（105種）が見られ、日本国内でも絶滅危惧種が集中している生物多様性ホットスポットの一つとなっています。

また草原は、牛の放牧地として安心・安全な肉用牛を生産し、日本の農畜産業を支えています。加えて草原は、森林に匹敵する優れた水源涵養機能を持っています。草原に降りそそぐ年間2,500mmを超える多量の雨は、広大な大地にしみこみ、6つの一級河川の水源となり、約230万人に水を供給する九州の水がめとなっています。阿蘇各地1,500箇所以上で湧く水は名水として知られています。

さらに、千年に及ぶ人と草原との関わりは、野焼き、盆花採り、干し草刈り、草小積みなど独自の文化を生み出し、それらは阿蘇の自然とともに多くの文学作品にも取り上げられています。また最近の調査では、野焼きによって植物体の中の炭素を一部地中に蓄積する効果が

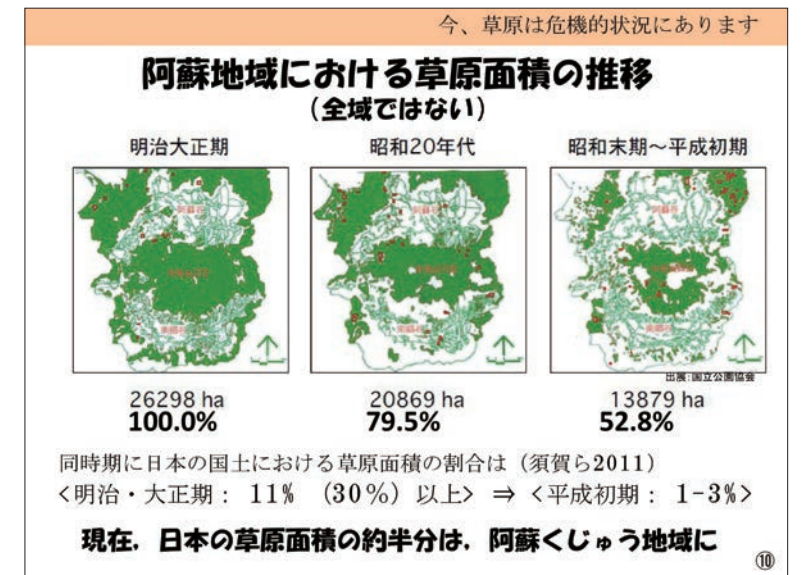


図1 全国の草原は明治・大正期から1/10以下になった

あるなど、地球温暖化防止にも一役買っていることが明らかになっています。

近年、全国各地で災害が起きていますが、草原は山火事防止や土砂崩壊防止など、災害防止機能もあります。野焼きを続ける理由の一つに大きな山火事と土石流災害を最小限にとどめることがあげられます。野焼きが中止され草原が荒れると「霜崩れ」という土砂流失や崩壊が起こる危険性が高くなるのです。

このように、多面的な機能を有し、様々な恵みをもたらす阿蘇の草原は「九州の宝」として評価され、草原景観を含む阿蘇地域全体が2013年には「世界農業遺産」、2014年には「世界ジオパーク」に認定されています。

阿蘇草原の危機

長い間、人々は大切な草原を守り利用してきましたが、近代化による農業形態や生活様式の変化にともない草刈りや放牧で利用される草原の面積は大きく減少しました。また、畜産業の低迷による後継者不足・高齢化により、野焼き・輪地切りといった草原維持のための

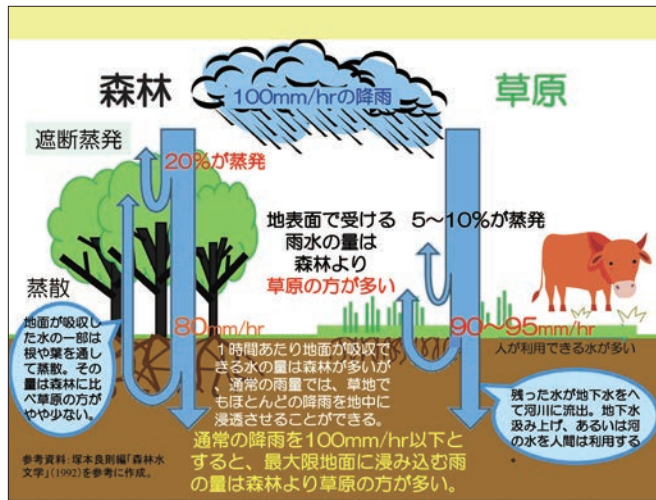


図2 草原は森林に匹敵する水源涵養能力がある

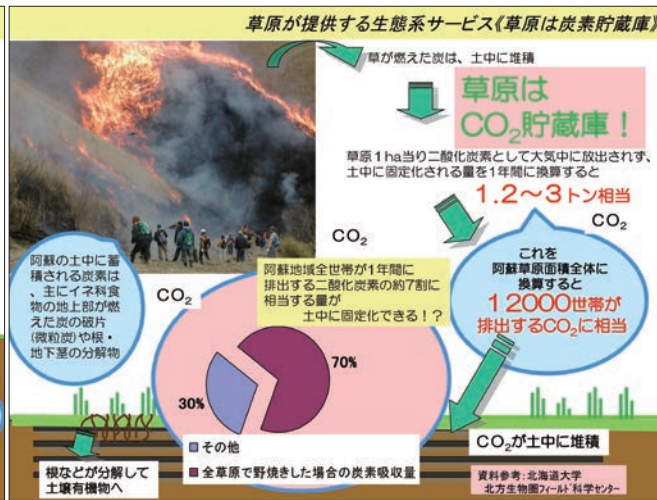


図3 野焼きによる草原の維持は地球温暖化の抑制に貢献している

作業がむずかしくなり、放棄によるヤブ化など草原面積の減少・草原の変容が進んでいます。それに伴って、阿蘇らしい草原景観が損なわれ、草原生態系の多様性が失われることなどが問題にされるようになりました。

農村・都市・企業・行政の連携で草原を守る！ —野焼き支援ボランティアの誕生—

草原の危機が問題視され始めてまもなく「阿蘇グリーンストック運動」が始まりました。『阿蘇の緑の大地（草原・森林・農地）を広く国民共有の生命資産（グリーンストック）と位置付け、農村・都市・企業・行政四者の連携で後世へ引き継ぐ』をスローガンに、県内企業・団体・行政・市民からの拠出金により1995年に財団法人が設立され、2011年に公益財団法人へ移行しました。

1999年から始まった「野焼き支援ボランティア活動」は、九州を中心に全国からボランティアを募り、研修会への参加を義務付けたうえで、人手不足や高齢化によって、野焼きや輪地切りの持続が困難な牧野へ派遣するものです。やがて20年を迎える地元以外のボランティアを取り入れた野焼き支援活動は、阿蘇千年の草原の歴史の中でも初めてのことであり、地元からの期待も大きく、社会的にも大きな反響と評価を得ています。

当初は「地元で続けるのもやっとのきつい作業には誰も手伝いに来ない」と言われていましたが、いざ募集をかけてみると初年度の研修会には290名の方が参加されました。

翌年には財団のもとに「野焼き支援ボランティアの会」が発足。財団の活動会員と位置付けられ、現在900名が登録し活動を展開しています。都市在住の山好きの方が多く、中心年齢は60歳以上。『阿蘇への恩返し』



写真4 火を見守る野焼き支援ボランティア

を合言葉に、県内外から、遠くは関西や関東から駆けつける方もいらっしゃいます。ボランティアの方は、参加することで一般では入れない草原景観の堪能、地元の方の感謝の言葉、汗を流す充実感などを味わうことにやりがいを感じているようです。

開始以来増加の一途をたどったボランティアの派遣要請には、財団の事務局だけでは対応が困難で、2001年にはリーダー制度が発足し、会員の約1割にあたる人数のリーダーの協力に大変助けられました。リーダーとは、野焼きなどの経験を積み、現役リーダーからの推薦を受け、更に役割や心得、救急救命など特別な「リーダー養成研修」を受講したボランティアです。年に3~4回活動内容や方針などを話し合う「リーダー全体会議」を行い、ボランティアの育成、指導、何より実際の活動の際にはボランティアを統率・サポートするという大変重要な役割を果たしています。

このように、熱心なボランティアの皆さんの活動に地元農家の方も感銘を受け、高齢化と後継者不足に悩む地元からの要請も年々増加し、7牧野110名から始まった野焼き支援ボランティア活動は、今年年間70牧野の参加人数が延べ2,500名を超す一大事業となりました。現在、阿蘇全体の4割強の牧野にボランティアが入って、草原維持にかかわる様々な支援活動を行っています。

阿蘇草原保全・再生に向けた様々な取り組み

近年、草原の価値や重要性が改めて見直され、草原保全・再生へ向けた様々な取り組みが行われています。

阿蘇の貴重な草原環境を子供たちの世代に引き継ぐためには、様々な方が共通の認識を持って、長期にわたり連携していくことが求められます。このため、2005年12月に環境省を中心に、牧野組合や活動グループ、行政、研究者など103の個人および団体の参加により自然再生推進法に基づく「阿蘇草原再生協議会」が設立されました。現在259の構成員で構成され、草原保全・再生に基づく全体構想という共通の目標に向かって連携して活動しています。

2010年10月には、阿蘇草原の多面的な機能を受恩者である県民、国民が支えるという意思のもと、行政、経済界、学会、報道機関で構成する「阿蘇草原再生千年委員会」が発足しました。この委員会は阿蘇草原再生協議会、阿蘇地域の世界文化遺産への登録を支援し、草原再生募金の呼びかけやシンポジウムなどの開催で阿蘇草原再生の取組みを更に広める活動を行っています。



写真5 「阿蘇への恩返し」を合言葉に活動が続いています

熊本県も草原の危機的状況に対し、2012年に地域振興戦略「かばしまイニシアティブ」を打ち出し、これまでの農畜産、観光、環境行政による草原の間接的な支援から一歩踏み込み、ボランティアの拡充、野焼き支援活動継続と安全対策のための財源確保、草原再生事業への取り組みも進められています。

また2015年には、環境省と阿蘇市により「阿蘇草原保全活動センター」が建設され、草原に関わる様々な情報収集や学びの場の拠点となっており、「阿蘇グリーンストック」が、その運営を担っています。

このように草原再生のための大きな動きが高まっていますが、まだまだ多くの方の連携と協力が欠かせません。国民の貴重な財産である阿蘇の草原を何としても守り、次の千年に手渡すために、今後も行動し続けていきたいと思っています。全国の皆さまのご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。



写真6 2015年4月、阿蘇市に建設された「阿蘇草原保全活動センター」